

科目名	期別	単位数	開講年次	担当教員名
(新) 刑法Ⅱ	後期	2単位	(標) 2年 (既) 1年	森尾 亮

授業目的	<p>本講義は、最高裁をはじめとする（近時の）主要な裁判例の分析を通して、刑法に関する重要な論点（主として刑法各論であるが、刑法総論も含まれる）を確認するとともに、それらを含む類似の事例問題を検討し、判例の意義や限界について理解を深めることを目的とする。</p> <p>なお、本講義は、旧カリキュラムの2年次生にとっては必修科目ではないが、2年次における「刑法」科目はほかにはないので（3年次までのブランクをなくすために）、ぜひ受講することを勧めたい。</p>
------	--

達成目標	<p>本講義においては、</p> <p>①題材となっている判例の意義や射程について検討し、理解を深めること</p> <p>②類似の事例問題を検討し、的確な分析に基づいて、妥当な解決策を示せるようになることを目標として授業を進める。</p>
------	---

授業計画と予習事項	回数	各回タイトル	授業内容・予習基本事項
	1	傷害罪 (同時傷害の特例)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大阪高判昭和62.7.10（百選Ⅰ&lt;83&gt;事件）</li> <li>・大阪地判H9.8.20</li> </ul>
	2	業務妨害罪	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最決H14.9.30（百選Ⅱ&lt;23&gt;事件）</li> </ul>
	3	放火罪	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最判昭和60.3.28（百選Ⅱ&lt;87&gt;事件）</li> <li>・最決H15.4.14（百選Ⅱ&lt;86&gt;事件）</li> </ul>
	4	財産罪の保護法益	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最決H1.7.7（百選Ⅱ&lt;25&gt;事件）</li> <li>（物の他人性について、最決S61.7.18（百選Ⅱ&lt;77&gt;事件参照））</li> </ul>
	5	不法領得の意思	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最決昭和55.10.30（百選Ⅱ&lt;30&gt;事件）</li> <li>・最決H16.11.30（重判H16刑6）</li> </ul>
	6	強盗罪	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最決H14.2.14（天井裏潜伏事件）</li> <li>・最判H16.12.10（百選Ⅱ&lt;40&gt;事件）</li> <li>・東京高判H17.8.16（（事後）強盗殺人否定事件）</li> </ul>
	7	中間試験	
	8	詐欺罪（1）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最決H15.12.9（重判H16刑10：釜焚き事件）</li> </ul>
	9	詐欺罪（2）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最決H15.3.12（百選Ⅱ&lt;49&gt;事件）</li> </ul>
	10	横領罪・背任罪	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最判H15.4.23（百選Ⅱ&lt;67&gt;事件）</li> <li>・最決H15.3.18（重判H15刑6）</li> </ul>
11	盗品等関与罪	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最決H14.7.1（百選Ⅱ&lt;74&gt;事件）</li> </ul>	

	12	文書偽造罪（１）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大阪地判H8. 7. 8（百選Ⅱ&lt;93&gt;事件）</li> <li>・最決H11. 12. 20（百選Ⅱ&lt;99&gt;事件）</li> </ul>
	13	文書偽造罪（２）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最決H15. 10. 6（百選Ⅱ&lt;100&gt;事件）</li> </ul>
	14	賄賂罪	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最判H17. 3. 11（百選Ⅱ&lt;110&gt;事件）</li> </ul>
	15	犯人隠避罪	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最決H1. 5. 1（百選Ⅱ&lt;130&gt;事件）</li> <li>・札幌高判H17. 8. 18（百選Ⅱ&lt;131&gt;事件）</li> </ul>
授業方法・ 予習上の留意点(各回指示以外) 自習事項	<p>(1) 予習 受講生は、事前に提示された「判例」を予習したうえで、配布された「設問」に対する「解答案」を作成しておく。解答案には、①問題の所在、②解答への筋道（論理展開の概要）、③結論（全体のまとめと罪数処理）を箇条書きで示しておく。「解答案」は授業開始前に提出を求める。（→平常点）</p> <p>(2) 授業 (a) 授業前半では、いくつかの解答案を取り上げ、質疑応答を行う。 (b) 授業後半では、受講者全員で討論を行い、状況に応じて教員が解説を加える。</p> <p>(3) 復習 授業内容を踏まえ、「解説レジュメ」や「参考文献」などを参照しながら、設問を再検討する。授業の理解度の確認のため、適宜、事例問題についての最終的な「答案（完成版）」を作成し、提出してもらう。（→平常点）</p>		
評価方法と 評価基準 (期末試験. レポート. デ イベート等)	<p>①平常点30%、②中間試験30%、③定期試験40%の割合で評価する。 欠席によるマイナス評価は平常点の中で考慮する。一定数以上の欠席は、規定により定期試験の受験資格がなくなる。</p>		
テキスト 独自教材	<ul style="list-style-type: none"> <li>・『刑法判例百選Ⅱ各論（第6版）』（有斐閣：2008年）（必携）</li> <li>・事前に該当判例に関連した「設問」を、事後に「解説」を配る予定である。</li> </ul>		
参考書 (3～5冊)	<p>演習向けの本として、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・山口厚『新判例から見た刑法（第2版）』（有斐閣：2008年）</li> <li>・島田聡一郎・小林憲太郎『事例から刑法を考える』（有斐閣：2009年）</li> <li>・井田良ほか『事例研究刑事法Ⅰ刑法』（日本評論社：2010年）</li> <li>・大塚裕司『刑法各論の思考方法（新版）』（早稲田経営出版：2007年）</li> <li>・大塚裕司『ロースクール演習刑法』（法学書院：2010年）</li> </ul>		